

いなかおカ IV



2001 No.140

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XII

下馬部会 斎藤 賢一

今回はミャンマー（ビルマ）の仏教遺跡を見学したいと思います。ミャンマーは長い間、鎖国をしており20年前に訪れたときには1週間しか滞在できず、決まった場所しか旅行できませんでした。現在はまだ解放されていない地域もありますが主なところへは、ほとんど行けますし、観光ビザで1ヶ月滞在できます。それでは首都ヤンゴン（ラングーン）に行きましょう。ヤンゴンへは開空から直行便が出ています。ヤンゴンの町は長い間英国の植民地でしたので、都市計画の基に建設され、緑が多く、道路も広く、コロニアルな建物も残っている大変美しい町です。以前は自動車もほとんどなく、高い建物もありませんでしたが経済開放政策によって、自動車の数も増加して、高層のビルやマンション、ホテルなどが建設されています。他の東南アジアの首都と違って、オートバイ、客引き、物乞いがほとんどないため非常に落ちついた印象を受けます。

まずはミャンマー人の心の拠り所である黄金に輝くシュエダゴンパゴダへお参りに行きます（写-1）。パゴダとはストウパ（仏塔）のことで、このパゴダは2500年前にミャンマー人の商人がブッダと出会って、8本の聖髪をもらいうけ、これを奉納したのが起源だとされています。ここで「八曜日」についてお話ししなければなりません。ミャンマー人にとって何月何日

に生まれたかより、何曜日に生まれたかが重要で、生まれた曜日によってその人の基本的な性格、人生、相性などが運命づけられます。「八曜日」は星、方位、動物によっても表され、西暦の七曜日との違いは水曜日が午前と午後に分かれることです。パゴダには必ず各方向の方位に「八曜日」の祭壇が設けられ、その曜日に生まれた人たちがお供えをしたり、仏像に水をかけたり、お布施をしたり熱心にお祈りしています。それはシュエダゴンパゴダに限らず、村の小さなパゴダでも早朝から夜まで、老若男女を問わず祈りを捧げています。朝早起きをすれば托鉢僧に寄進する人々の姿が見られるでしょう。

ヤンゴンにはまだ見るべきところがあります。第一の目的地、北に300km自動車です5時間のピイの町へ出発します。ここはミャンマーの3大パゴダの一つであるシュエサンドーパゴダがあり、ピイはその門前町になっております。シュエサンドーパゴダはシュエダゴンパゴダと同様黄金に輝く立派なパゴダで全国各地からお参りに来る人々でにぎわっております。私達の目的はここから南東9kmにある、1～9世紀に栄えたピュー族の古代王国シュリ・クシェトラの遺跡です。現在は草むらの中に点在する廃墟になっておりますが、東南アジア最古の遺構として重要です。ここはレンガの城壁（ほとんど残っていない）で囲まれた円形の都市で中心に王宮跡があり、城壁の内外に4つの寺院と、3つのパゴダが残っています。ここを見学するためには自動車（4WDでも）では入っていきませんので牛車に乗って見学します。それでは城壁の外側にあるポーポーパゴダへ向かいます（遺跡の旅XI写-5）。周囲には菊やグラジオラスなどの花を作っている畑や、竹藪、林、など道なき道を牛車は進みます。牛車は2頭の



写-1「シュエダゴンパゴダ」ヤンゴン

牛によって引かれ、おそらくこの都が栄えた当時も人々はこれと同じ牛車に乗って移動していたことを考えるととても楽しくなります。ポーボーギーパゴダが草むらの中に見えてきました。このパゴダとパヤージーパゴダ、パヤーマーパゴダの3つは共に7世紀のもので砲弾型の長円錐形をした、とても古い形のパゴダで他の地域には見られません(写-2)。



写-2 「パヤーマーパゴダ」ピー

すぐそばにベーバー寺院があります。とても小さい寺院で内部には仏像が安置されています。ここから少し離れたところにレーミエッター寺院があります(写-3)。ピラミッド型の屋蓋を持ち入口は四方にあり、その内部4面に各々仏像のレリーフが安置されており、ベーバー寺院とともに後のバガン王朝の寺院建築におけるプロトタイプと思われます。



写-3 「レーミエッター寺院」ピー

そのほかの寺院やパゴダを見学していたら日が

だいぶ傾き、周囲が茜色に染まってきました。村の中を抜けていくと家のお母さんが夕食の支度をしており、お父さんは畑仕事から戻り、井戸で体を洗っています。まわりでは子供たちがブタやニワトリ、イヌたちと駆けまわりとても楽しそうです。この夕暮れの一瞬、私達が失ってしまったこんな風景を期待して私は旅行しているのかもしれませんが。

ここから次の目的地バガンまでは自動車で8時間、途中ポッパ山によっていきます(写-4)。



写-4 「ポッパ山」

ポッパ山は仏教遺跡ではありませんがここはミャンマーの土着宗教であるナツ神を祭った聖地です。ナツ信仰とはアニミズムのひとつで、あらゆるものに精霊が宿ると信じられ、その代表的な神(精霊)は37あります。ナツ神を祭る祠は街のそこかしこにあり、ガジュマルの巨木の下、パゴダのまわり、また自宅にもあります(写-5)。人口の8割以上が仏教徒であり、人々は苦しみや欲望から解放された来世を願って祈り続けます。しかし人には日々の営みがあり、現世利益の信仰が必要になり古来の民間信仰ナツ神が盛んになりました。ポッパ山は自然の奇岩タウン・カララの頂上に仏教寺院が建てられ、その参道にナツ神を祭った祠があります。頂上まで急な階段を20分ほど登るとそこは360度のパノラマです。



写-5 「ナツ神-タラバ門」バガン

ここからパガンまでは1時間半ぐらいです。パガンには立派なホテルはありませんでしたが、現在はシンガポール資本のプール付き、ゴルフ場付きの5星のホテルがあります。パガンが都として栄えたのは11世紀から13世紀にかけてで、その間広大な土地におびたしいパゴダや寺院が建立され現在でも2000以上残っています。もともとビルマ族は9世紀ごろ雲南省南部から南進してエーヤーワディー河中流域で水稲耕作を営んでいた先住民族モン族の集落を武力で占領しました。そしてパガン王朝を築き、初代王アノーヤターが1057年にモン族の王国タトンを攻め上座部仏教をもたらし、モン人の建築家、彫刻師などを捕虜としてつれてきました。そして上座部仏教に帰依し、都の一大造営計画を始めました。シュエズイーゴンパゴダを始め多くのパゴダ、寺院を建立し、更に皇族、高官、商人などこぞってよりよい来世を願って次々に建立いたしました。そして13世紀フビライ・ハーン率いるモンゴル軍の侵攻を受けるまで250年余りの間に5000以上のパゴダ、寺院が建築されました。



写-6「日の出のパガン遠望」ミンガラセーディーパゴダ

パガンを観光するには最低でも3日は必要です。パガンに来たら日の出と夕日は必ず見てください。それには高い寺院の上から眺めなければなりません。タビニュー寺院、ゴードーバリン寺院が一番高い寺院で以前は屋上から眺められましたが、現在は寺院保護のため上には上がりません。パゴダはほとんど上がれるのでパゴダから眺めるのがよいでしょう(写-6)。パガン寺院の特徴は本格的なアーチやヴォールト構造が認められることです。他の東南アジアの

遺跡は開口部や廊下がほとんど迫り出し積みで作られているため張間は4~5mが限度で、大空間を覆うことは不可能ですがパガンの遺跡はすべて垂直積みなので大きな空間を作り出すことが可能になりました(図-1)。

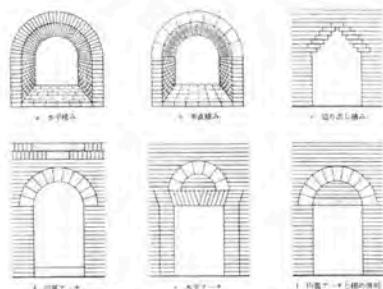


図-1「アーチとヴォールト」東南アジアのヒन्दウー・仏教建築

第2の特徴は内部の壁画です。寺院の内部には仏伝図やジャータカ(本生話)、観音菩薩、キンナラなどの美しい壁画が残っています(写-7)。第3にパゴダや寺院の外壁に彫刻されたジャータカのパネルが埋め込まれています。このジャータカの装飾パネルはミャンマーの誇る仏教美術として世界に誇れるものです(写-8)。また外壁には植物文様、カーラ、ドウバラパーラ、天女、キンナラなどが彫刻され(写-9)、特に開口部上部を飾る火焰文様はパガン独特のもので(写-10)。



写-7「壁画-観世音菩薩」パヤートンズ寺院



写-8 「ジャータカ(サーマ本生話)のパネル」西ベッレイパゴダ



写-9 「彫刻-ドウバラパーラ、女神」チャウグウーミン寺院



写-10 「火焰文様」クービヤウジ寺院

それでは実際に見学しましょう。パゴダでは黄金に輝くパガンを代表する壮麗なシュエズイーゴンパゴダ、とても形が美しく夕日のポイントのミンガラゼーディーパゴダ、そのほかダマヤズィカパゴダ、シュエサンドゥーパゴダ、特に基壇のジャータカが素晴らしい東ベッレイ、西ベッレイパゴダなどがあります。寺院ではパガンで最も美しいアーナンダ寺院、内部の

四方にはそれぞれ黄金仏の立像が納められています。タビニュー寺院とゴードーパリン寺院はパガン1、2の高さを誇りランドマークとして市内のどこからでも見分けられます(写-11)。



写-11「夕日遠望-アーナンダ寺院(右) タビニュー寺院(左)」ヤハグジー寺院

ダマヤンジー寺院は独特のピラミッド型の巨大寺院で未完です。パガンの寺院内部にはほとんどすべて仏像が納められています。特徴は蓮華座の上に結跏趺坐で座っており、全体にずんぐりとした感じで頭が前屈みに下の方を見るようで、首が短く、耳たぶが長く伸びて肩まで届き、手は親指をのぞいて他の4本の指の長さが同一になっております。そして古くなるとすぐに塗り替えられるので色はとてもけばけばしく、日本の仏像とは大違いです(写-12)。



写-12「仏像」ダマヤンジー寺院

仏像は上座部仏教のためほとんどがブツダですが、以前には大乘仏教やヒンドゥー教が信仰

されていたので、観音菩薩像やヒンドゥー神像も出土していますし、壁画にも残っています。ナッフラウンチャウン寺院はパガンに現存する唯一のヒンドゥー教寺院で内部にはヴィシュヌ神の化身像が10体納められています。マヌーハ寺院は本堂が一杯になるほど大きな仏像が納められています。ナンバヤ寺院は内部の柱に見事なブラフマー神（梵天）の浮き彫りがあります（写-13）。



写-13「ブラフマー神(梵天)」ナンバヤ寺院

壁画の美しい寺院はスラマニ寺院、グービャウッチー寺院、アベヤダナー寺院、ローカティバン寺院、パヤトズー寺院、ミンバヤグー寺院、テッチャムニ寺院などがあります。いずれも天井から柱、壁一面に描かれています。ほとんどの寺院は写真撮影禁止です。ヴィハーラ（僧院）の遺構としてはソーミンジー僧院、壁面の彫刻が美しいレーミエッター僧院、など、窟院ではチャンシッターウーミン、一部が地上の寺院で一部が地中の窟院になっているチャウグウーミンなどがあります。また唯一残る城壁跡のタラバ門（ここにはナツ神の祠があります）など見所が沢山あります。

一日の最後はシュエサンドウーパゴダからエーヤーワディー河に沈む夕日を見ることにしましょう。ここは夕日のポイントとして有名なので早い時間から夕日の沈む西側の一番高い基壇に人々が集まっています。パガン王朝の栄華を思い浮かべながら夕日の沈むエーヤーワディー

河を眺める至福のひとつです。時間がありませんら黄昏時のエーヤーワディー河クルーズも素敵です。水を汲みに来たり、沐浴に来たり、食事の用意をしたり、人々と河の関係をかいま見られます（写-14）。

ミャンマーの食べ物ですがミャンマー料理は味がうすい割にとっても脂っこいので私はあまり好きではありません。しかし中華料理はとても美味しく特に麺類は最高です。野菜の沢山はといったタンメン、ヤキソバ、チャーハン、一品料理すべて日本人の口に合います。特にシャン族（中国の雲南地方を中心とする民族）のシャン料理は豆腐、こんにゃく、納豆などを使い、中国料理と日本料理のミックスした飽きのこない料理で絶対お勧めです。

現在ミャンマーは政治不安による海外投資激



写-14「エーヤーワディー河の夕日」

減、民主化問題、少数民族問題など様々な問題を抱えています。しかしミャンマーの人々は仏教による高い徳徳を持っており、貧しい中にも出来る限り満ち足りた精神生活を送るすべを持っており、それは私達観光客が目にする寺院における敬虔な祈り、けして裕福ではない人々のお布施、寄進、見知らぬ私達に対する親切心などに表れています。もしあなたがどこかにレストランはないかと聞いたら、たいがいのミャンマー人は家に来て食べなさいと答えるでしょう。なにしろミャンマーの挨拶はタミンサーピーピーラー（ご飯食べた？）ですから。

ミャンマーでは時間がとてもゆっくり流れます。朝日に輝く寺院群の中に身をおいたとき、落日のエーヤーワディー河にたゆたうとき、仏教と微笑みの国ミャンマーのとりこになるでしょう。